

う。また彼女によってロマン主義は△自然と社会の△他者性▽へのたんなる隷従▽という敗北の名を負わせられていくが——事実それは啓蒙的合理主義と同じような敗北を結果としていても——なおかつ現代の状況への挑戦を忘れてはいない。いかなる思想的系譜に立ってしようとも、現代の△状況▽を度外視して思想的営為が成りたつわけはない。キリスト教哲学もまた同様である。そしてわが仏教哲学も、この△状況▽のなかへ投げ入れられることによってしか甦るみちはないであろう。

政治に対して、あえて懐疑主義の立場を支持せざるをえないのは、哲学不在の政治行為は△悪▽への加担、△擬制▽への隷従しかもたらさないからである。

われわれにとって△宗教▽の問題が課題であるとするならば、キリスト教△社会神学▽に対する△仏教哲学▽は無防禦である。例えば△平和▽について協同の場をもったとき、われわれは△神学▽による△平和の概念▽の支配下に入る以外にみちはない。そのことを考慮せずに、われわれの△平和▽の理念も行動も自立しえないのである。そして△正義▽不在の政治的現実——△擬制▽の側からは、まるまるのみこまれたうえて△手段▽として隷従を強いられるであろう。

このような問題について反省を試みるために△ユートピア以後——政治思想の没落——▽の紹介を借りて問題を提起したわけである。この著書を啓蒙主義からの現代への解答として受けとるとともに、他にも現代への政治哲学的アプローチの諸説を求め、それを批判的に摂取しなければならぬまい。(紀伊国屋書店刊)

丸山照雄

孤独な群衆 何のための豊さ

リースマン 著
加藤秀俊 訳

この二つの著書は、著者自身が日本語版の序文で指摘しているように「アメリカ論のひとつ」であると同時に、われわれにとってはむしろ△アメリカ▽そのものであり対象的△素材▽である。素材という意味は、月の岩石のかけらがわれわれにとって月を知る素材であるように、リースマンの思考とその著作は、われわれにとってアメリカのかけ

らである。

リースマンにおける現代アメリカ社会の認識方法は、羅列的であって、きわめて多角的なようにみえる。しかし似たような方法が日本にもないわけではない。例えば柳田國男の民族学の方法や関心のあり方である。このようなものを今日では文化人類学的方法と呼ぶのが妥当であろうかと思う。リースマンの現象認識におけるもうひとつの方法はフロイド及びその学派に属するE・フロムからの影響による社会心理学的なものであろう。彼自身の説明によれば、シカゴ大学にいたとき、 \wedge 文化とパーソナリティ \vee という研究委員会の委員長を務めたという。ここでは人類学・心理学・社会学・経済学・政治学・歴史学の専門家が参加し学問交流の教課を展開しようとしたのであるという。このことを彼は \wedge 心の躍るころみ \vee であったと書いている。

専門分化した社会科学を総合していくためにはいろいろな実験が必要であろうと思われるし、今日綜合化への要求はきわめて強い。しかしそれを \wedge 方法 \vee 的模索をぬぎにして行ったのでは文化人類学と心理学を折衷した素朴臨床主義の現象学に終ってしまふであらう。このことを \wedge 多元主義的アプローチ \vee として彼は自己肯定している。また \wedge さしあたりの仮説 \vee による \wedge アメリカ人についての哲学的な

考え方 \vee とも云っている。

こうしたリースマンの態度を、アメリカにおける \wedge 貴重な \vee 懐疑主義 \vee （加藤秀俊）であると評価するみ方もある。リースマンの分析類型によれば、彼自身の願望の表現が \wedge 他人指向型 \vee なのであるといえよう。 \wedge 他人指向型 \vee の \wedge 価値 \vee は \wedge その解放性だの、抑圧がないことだの、他人に対する関心だの、変化につねに対応できるような性質だの \vee にあるという。他人指向型に対して \wedge 内部指向型 \vee をあげ、これをアメリカのカウボーイ型としている。そしてこれは克服され消滅していく傾向であるとみている。

\wedge アメリカ社会構造は既存のハイアラキーを持たず、平等と社会的モビリティについて強い欲求を持っているから、そこから当然、その心理学的帰結として他人指向型が出てくる \vee という説を支持しているようである。

われわれにはリースマンの云う \wedge 内部指向型 \vee とか \wedge 他人指向型 \vee とかという言葉はなじみがない。彼の思想を理解するためのひとつの重要な概念であるので、解説しておかねばならないであらう。それには彼自身の言葉によるのがもっともよい。

\wedge 内部指向型及び他人指向型という概念は社会的状況と社会的性格を同時に示す言葉としておおよっぱに使われて

いる▽内部指向型の人間とは、一口でいってしまえば「かたい」(リースマンがそういう表現を使っている)人間のことである。具体的にいえば△サデイストや権威主義者▽△南部の多くの町でシエリフの地位を獲得しようと競争している人たちなどもそれに近い▽また一握りのエリートによって作られ、かつ運営されているような社会、すなわち△全体主義的社会▽も、内部指向型としてみられる。

逆に他人指向型というのは、△しなやかな▽△どうにも変る▽人間である。社会的性格としては△植物的な形で発展する民主的社会▽である。またアメリカの奴隷はニグロであって、原住民のインディアンは奴隷になれなかったのは、△ニグロたちの社会的性格はきびしい労働条件にたえる性質のものであったからなのであり▽△アメリカ・インディアンは保護地域に生活している▽のは、ニグロが△他人指向型▽でありアメリカ・インディアンが内部指向型であったからであると彼は説明しているようにみえる。

このようにみてくるとすでに明らかのように、リースマンはアメリカ論としてアメリカの現実を認識しようとしているようにみえるが、実は、二つの「人間と社会の性格類型」すなわち他人指向型・内部指向型という概念で文化を分析しているのである。

彼はいう△「孤独な群衆」を書くにあたってわれわれは古い社会科学、すなわち歴史学・政治学・経済学などが社会変化について考える考え方が不十分であるということを見出した。精神分析学的な心理学を使えば、その不十分なところは埋められるはずなのである▽と。

「孤独な群衆」の初版がアメリカで出版されたのは一九五〇年である。版元でさえ三・四千部しか売れないと思っていたのが、ロングセラー・ベストセラーとなり、五〇万部を売ったという。彼の思想がアメリカ社会に対して樂天的なまでに夢を求めているからではないだろうか。彼自身が△アメリカ社会とアメリカには反逆者になりたくない。異邦人でもありたくない。私は鋭くはあるが温い目をもつ批判者でありたい。▽(朝日ジャーナル・1968 No 52 「リースマン」久野昭)と書いているというが、大衆社会状況のなかで危機感を深めていくアメリカ人にとって、リースマンのエッセイは救済的な意味をもったのではないだろうか。朝鮮戦争にはじまる国際関係の緊張とマツカーシズムの悪夢のような恐怖のなかでもアメリカの大衆は△アメリカ▽を信じたかったのであろう。その可能性をリースマンは描いてみせたのである。ベストセラーになった意味はそうとしか理解できない。

しかしわれわれにとつてリースマン描くところのアメリカは夢でも可能性でもない。社会心理学的解説つきのルポルタージュとして読むならば、アメリカを理解するうえでの参考となる好著である。またリースマンの解説的部分はアメリカ知識人の現実認識を知るうえでの資料的な意味をもつであろう。それ以上でも以下でもない。ルポルタージュとして読むためには解説は不要である。それは一人一人が読むことによつて何ものかを得ることが必要であろう。「何のための豊かさ」の方は、評論集のような形になつてゐるため、よりリースマンらしい、多面的関心がうかがえる。例えばそれは教育・人生・消費・レジャー・都市・自動車・社交・芸術などについて書かれてゐる。

このような多面的（彼は多元的ともいう）並列的な関心を処理している認識の方法は、それほど複雑なものではない。しかし、彼の次の言葉は何を意味してゐるであろうか。

△実証的かつ、理論的な社会科学の業績をふまえた上で今「孤独な群衆」を読みなおしてみると、私はこの本の多くの部分で一般化をしすぎていることに気がつく✓この部分から筆者はリースマンを理解することとアメリカを理解するうえでの、何かのヒントを得られるように思えた。①

リースマンの理論は彼の願望するほどの普遍性にはおそらく耐えられないであろうこと。（アメリカ社会学の理論がよく犯す普遍的適応による失敗が見られる）②アメリカ社会の現実には△アメリカ✓として普遍化できない多様性があるであろうこと。③リースマン自身の意識のなかに、△一般化✓することへの恐怖心があること、それは彼らの社会科学の理論が、△社会✓を対象としていながら、実は社会を個人の並列的または空間的集積であるという意識でとらえていることである。個人の行動の原理はそのまま社会行動の原理として適応できるものと考えてゐるらしい。それは個人の自由を追求してきたアメリカ社会の伝統的で疑う余地のない前提であるのかもしれない。そうした考え方でのあるわな失敗を「思考と行動における言語」（岩波書房刊）のH・ハヤカワの理論の中にもみることができ、リースマンの心情的ヒューマニズムやアメリカ社会に対する愛情は理解できても、社会科学理論としての△社会的パーソナリティ✓理論などわれわれとしては受けいれようもない。正直にいつて「そういうにみることもできるんですけどね」と答える外はない。彼のようなぼう大なエネルギーをそそいで、その仮説に従つて、文化論なり文明論なりやってみようなどとは思えないのである。彼のいうように△古

社会科学の不充分な点を精神分析学的心理学でつなぎあわせるという発想（発想）という程度のものであろう）で綜合化あるいは、社会科学の組織化ができるわけではないのである。しかも彼はそのことを次のように説明している。△去来する記憶、夢、子どものあそび、離乳の仕方広告のシンボリックな内容、大衆小説や映画などのデータは、△低い扱いしかうけていなかったが△それらはじつは歴史の素材であったのである△と。彼の指摘していることに間違いはないが、彼はそのような△データ△のなかに△歴史△を解消してしまっている自己の理論に気づいていないのである。

彼の著書が△孤独△という言葉を用いているからではないが、この社会学の理論は△孤独△の理論であるといえるように思う。アメリカ社会の病疾は、理論そのものに反映しているのである。個人と個別的現象にのみ拡散していく社会学論は、政治の問題ととり組んだときもっとも悲劇的敗北を喫するのである。他のアメリカ社会学と同様、彼もまたその悲劇をこの著書のなかで示している。

リースマンの思想はアメリカ社会を病理学的に分析しながら、なおかつその基礎にユートピア志向のヒューマニティをひそめている。その夢多い思想もすでに△説教であり

訓戒にしかすぎない△（トム・ヘイドン）という批判をあびているという。彼はすでにアメリカの古い△良心△に属するのであろう。体制のなかで折衷的、自己矛盾的にユートピアを志向してみても、もはやアメリカの病疾は救済しないではなからうか。

この著書を取りあげたのは、日本にとつて深いかかわりをもつアメリカの、現代の危機状況を認識することが、日本の現代を認識するうえで不可欠なことであると考へたからである。主としてリースマンの社会学論の限界性への批判を試みたわけであるが、このようなリースマンの理論的姿勢を前提として、アメリカ社会からのレポートとしてこの著書に接してもらいたいと思つたのである。（みすず書房刊）

丸山照雄

周武法難の研究

野村耀昌著

本書は立正大学仏教学部長、野村耀昌教授の学位請求論文である。